



は何にしよう。」

「言はれても、

「うーん、いや、僕もつれていつて。」

を繰返すばかりである。平生無口で黙々ミ遊ぶ性の章にも、こんな感情的な場面があるのかしらミ、半ば感に打たれ、半ば胸つまる思で暫し慰める術をしらなかつた。なだめなだめた末に、

「それなら、このお家程のお土産なくちやいや。」

「いふことで、その夜は父に寝かせて貰つた。」

「こんな光景が、又一年後でなければ見られないのか。」

「ミ、私も眼頭がうるんで来た。」

翌日東京驛では、見送りの人々の混雑に紛れて、昨日の章ミしてはむしろ淡々すぎるほぎで、父ミの最後の握手もはにかみがちであつた。が、東京驛から歸つてきた家の中は、一人一人の滅じ方でありながら、まるでがらんミした、もぬけの殻のやうな空虚さである。これが、だれの胸をもついたものか、子供達が私の膝を手を占領しようミ争く。生れて間もない赤ちやんまでが、泣出す。

おのがじし 母を占めむミ寄る子等に、

我在りミいふか 高く乳兒啼く

私は、瞬間、男まさりのやうな力が、腕に盛り上つてくるのを覺えた。

「さう〜。その通り、御留守中は、お母様の御手々を

しつかり握つてゐれば大丈夫よ。」

心の中で祕かにつぶやくのであつた。

### 男の子の相手

女の子の相手は出来ても、男の子の相手は、少々苦手である。お角力もミりにくい。キャッチボールも、手を廻し足を舉げて打込む型は困難である。里の弟達が日曜なきに、章の相手に罷り出てくれるやうになつた。祖父様が、「忘れられ、わしも」ミ章を相手せられるミ、却つてスローモーションを笑はれる仕末。

子供の感情は、大雨砂礫を飛ばすこゝちはあつても、後は雨後の空の如く、何事もなかつた晴々しさである。父の出發當時の激越した感情も、靜まれば、もミの快活な章であるのに大いに安心した。併しこの心底には、父への戀情が

黙々として脈打つてをり、時を得れば、意識の表面に浮び出るこゝを屢々目撃するやうになつた。

## 父の姿

町を通り、父親と同じ位の背丈で、同じやうな洋服の色合を見るに、

「お父様ぢやない。」

こいふのである。あるまじきこゝろ思つても、振返らざるを得なかつた。

フィンガーチョコレートを指に挿み、煙草を吸ふ口付をして、「お父様のまね。」こいふ。その所作を笑ひつゝ、一抹の淋しさが胸をかすめる。

カバンの小さいのを貸してくれこいふ。何にするの。「こいふても、羞かしさうに自分の部屋へ駈込んでしまふ。やがて妹に、「早く歸つてね。」こいはせておいて、「うん、おみやげ買つてくるからね。」ミカバンを下げて外出のまねをする。スツーカーをいくつも自動車に積込ませた當時の父の姿が、いち早く章の網膜に焼付いたと見える。

父の留守中の淋しさを紛らせよう、夏休みになるに

早々鴨川へ出かけた。併し却つて父を偲ぶよすがにならうとは、思ひ及ばぬこゝろであつた。東京から遠いので弟達も来ず、知人の家の學生連では、章に遠慮がある。さりさて私に波乗りの藝當も出來がたい。

「お父様いらつしやつたら、去年の茅ヶ崎の様に、沖の方へ伴れていつて頂くんだがな。」

濱邊で砂遊びに興じてゐる手を休めて、沖の鷗を追ふ幼い腫が、時々かういふ嘆聲にうつろになるのを見た。家主のおばあさんも事情を察して一生懸命相手をしてくれる。

「さあ今日はお天氣だから、ボンボがまたお坊ちやまを待つてゐますよ。たくさん取つたら、ひよこ(Hyoko)ミ發音に御馳走してやつて下さい。」

「ボンボつて何さ。」

「オクターブ低音で章が飢ねる。」

「ボンボつて、あの昨日御つかまへになつた、スイ〜飛ぶ……。」

「トンボだよ。ボンボぢやないや。」

自分の片言を棚に上げて、章に方言を訂正されたばあさん

も、今はさうしてゐるか。

鴨川を引揚げて 家へ歸るなり「あらお父様わ。」といふ。なるほぎ今迄は旅行氣分だったので、家に着けば皆揃ふものと思つたのか、久仁子に「ロンドンにいらつしやるのぢやないの。分らない章さんね。」と言はれても、腑に落ちぬ顔付をしてゐるところに、子供らしい純情さがある。鴨川よりおもちやが豊富にあるので、東京着の第一聲も、そのまゝ紛れていつた。

### 父からの音信

父の旅は八月一杯かなり忙しい日程が立つてゐるので、秋風立つ頃には各地の繪葉書が大部畫帖を賑はすやうになつた。アジア特急の流線型列車が、シベリア廣野を横斷する勇姿を飛行機上から撮つた寫真なごは、殊に讚嘆措く能はざるやうであつた。伯林動物園の珍らしい動物の種類、オリムピックの運動競技の實況なごも、喜んだものである。ベルグラード、ブルガリア、ブタベスト、ブカレストの面白い發信地名に、いつか地圖を見るやうにもなつた。ドイツのヒットラーが獨逸國章を腕に舉手の禮をしてゐる

もの、イタリーのムッソリーニが馬上で軍隊を檢閲してゐる爽颯ぶりなご「素敵だな。」こませた口調で飽かずながめてゐた。

かつゑたる心にしみて讀む夫の

文に集る子の頭かな

地圖の上に指を進めて父います

國の遙けさ子らに語るも

バリー畫帖が届いた時、宮殿の莊麗さに眼を見張る姉の興味は興味ならず、ごこまでも、子供の生活の場面を面白がる。

「あゝ僕ご同じ幼稚園があらあ。」

キリストの傳道の集りも、宣教師を中に子供等が瞳を輝かして話をきく様は、正に幼稚園そのまゝである。子供ごいふものは、自分ご一番密接なものを興がるものである。

浦島にならぬか

待てご待てご、父は歸らぬ。或日、

「ごんなにお歸りにならないごお父様浦島にならない。」

ご眞顔で心配する。現實ごお伽の世界の半々に生活する子

供の質問に、私も眞顔で答へねばならなかつた。

「ほんさね。浦島にならないうちに歸つて下さいよ。」

お手紙お出しませうよ。」

又或日、

「お父様 早く御歸りになるさいいんだがな。」

「かうして」

「さうさう。」

「だつて、お父様お金一ぱい持つていらつしやるから、外國へゆかれたんだらう。僕その御金頂いて、汽車の大きいの買ひたいの。」

出立前に、換算した外國貨幣を見せたこゝがあるのを、思出してゐるのであらう。母親は子供から、先天的に、金力に於ては信用されないのには少々苦笑させられたが、まづ父親の絶對性を傷つけないで、

「おみやげあんなにおねだりしたのだから、今によいもの買つてきて下さいませよ。」

さいひながら、姉の幼稚園時代の質問を思ひ浮べてゐた。

「お母様、お金つて、毎日使へば終にはなくなるでせう。」

なくなるさうするの。久仁子の好きなもの買へないでせう。」

「お父様がちやんこ下さるから大丈夫よ。」

「お父様はさうから持つていらつしやるの。」

「お父様毎日會社で御仕事なさるでせう。それは皆日本の國の御役に立つてゐるの。それで日本の御國から頂くのよ。」

「それだつて、さのお家のお父様もさうなら、やつぱりなくなるでせう。」

「日本以外の國まで、物を賣つたり買つたりするの。それでたくさん御金が入るから大丈夫なのよ。」

追求愈々急なるに、そこで話題を轉換させたが、いたる應答ぶりを思ひ出す。それにつけても女の子の方は實際的である。

### 光榮の分配

十月二十一日女高師に皇太后陛下の行啓を仰ぐ。この日の喜びをものした章の手紙を左に。

キヨウ、コウタイゴウヘイカガ、アカイオジドウシヤデ

イラッシャイマシタ。オンナハアカイオクルマナンデスカ。ボクワビカリビカリノオウユギヲシマシタ。

後日御下賜の御菓子を拜受した。永地畫伯筆の父の畫像の前に、附屬小學一年の姉と二人で拜受の御菓子を出しあつて供へてゐる姿を見た時、固くなつてもよいから、このまゝロンドンへ送らうかと思つたほぎであつた。

### 姉 味 方

或日臺所の方で久仁子の泣聲がする。續いて章が険しい語調で、

「お母様にいひつけてやるから。」

と飛んでくる。顔を眞赤にして眼に涙さへ浮べて正に憤怒の相、

「お母様、いちやがお姉様を縁の下に突落したの、僕力一ばいぶつてやつた。もつこぶつてこようか。」

「まあお待ちなさい。」

と引返す章を追つて、臺所へ出た時には、又二つ三つ章の拳が飛ぶ。不用意にあけておいた揚板の下に、突然駈けて来た久仁子が落ちこんだまのここ。下女が突落したのでな

いこごを説明しても、なか／＼自論を撤回しない。平生手荒いこごを見かけないのに、この時ばかりは全くの姉味方であつた。「兄弟垣に闘ぐも外その侮を禦ぐ」氣持が、父の留守中は殊に濃くなつたやうである。

### 初 夢

昭和十二年が明けた元日、章は起きるなり私へ夢の話をしてくれた。

「お父様が御門の處にいらつしやつたから、一緒に伴れていつてさいふも、さん／＼行つておしまひになるので一生懸命に追つかけたの、終にくたびれて、いちやにおんぶして又追ひかけたら、もうごこにもいらつしやらなかつた。僕泣いちやつた。」

さいふ。正に初夢である。まところが不思議に久仁子も父の夢を見てゐた。

「あらお姉様もよ。でもお姉様のは、オリムピックのよ。

たくさんの見物人の前で久仁子マラソンをして、一等になつたの。そしたら皆がお人形やらキャラメルやらを下さつて持てなくなつたの。その中にテンプルちゃんのお人形あ

るんでせう。嬉しくつて、お父様にお約束しておいたお土産のテンブルちゃんもう要りませんと申上げようとしたら眼が覺めたの。」

一人は悲劇で終り一人は喜劇で終つてゐる。何きいふ偶然の一致であらう。話のやうな話である。眼を細くして話し合つてゐる子供の顔が、この時ばかりは西洋の名畫のやうに美しく見えた。

### 國際電話

三月六日地久節の當日、それは幸にきつて忘れられぬ國際電話交換の日でもあつた。夜七時ロンドンから電話があるきいふので、會社へ子供を伴れて出かける。道々、

「今日御電話でお父様が『草』とおつしやつたら、何き申上げるの。」

「ききくき、小首を傾げたのち

「僕タキシードでできましたよ。『ききいふの。』」

「それから。」

「早く歸つて下さいつて。」

「それではその二つをはつきり大きい聲でおつしやいなね」

定刻の七時に少々遅れて父の聲が傳はつてきた。久仁子を出し、續いて草を出す。

「お父様あ……。」

さすがに胸がつまるのか、きぎれ／＼漸くいひ果す。私が繰返して、もう一度その言葉通りに傳へる。それが海山を越えてきた聲音かと思ふ程はつきり聞こえるので、まるで襖を隔てた對面のやうである。

「お父様何きおつしやつたの」

「よし／＼つて。さあお父様のきこころへゆかうよ。」

「今の電話はロンドンからかゝつたのよ。行かれるもんですか。」

「姉に宥められても、私の手を引いて外へ出ようとする。

父の肉聲を聞いて急に押へてゐた戀しさが募るのも無理かぬこき。歸りの自動車の中で又、

「今度は御父様の處へ行くんでせう。」

を繰返す草に、私は却つて罪なこきををしたやうな後悔の念を禁じ得なかつた。

一時ひとときに喜び極まり果てければ

後の空虚うつろはいふべくもあらず

### 戸締はよいか

犬養健氏宅へ盗賊が入つて、女子學習院學生の御姉様が落ちついて退去させたこゝが夕刊に出たので、夕食後の話題になつた。それから二三日間、あの應揚な章の口から必ず寝る前に「戸締はよいか。」の質問を發せられた。さては萬一の場合の撃退工作にまで及ぶ。

「僕の電氣機關車皆やつたら歸るだらうか。」

「里の弟でも夜泊りにきて貰はうか。」こ祕かに決するころあつたが、そのうちに忘れてくれた。うっかりしたこゝは話されないと思つた。

### 海外ニュース

五月には戴冠式の記事が紙面を賑はせた。ロンドン在留邦人が、日の丸國旗を振りく、秩父宮兩殿下奉迎の寫眞などは、その細かい顔と顔との間から、父を探し出してくれといふのである。

ツェツペリンの遭難記事が出る。大西洋横斷を地圖の上

で示すき、かねて父がこの海を渡つてアメリカへゆく話してあるので「お父様わ。」といふ。「まだロンドンだから大丈夫よ。それに日本人一人もなしもあるからよかつたわね。」こいふき強く頷く。去夏支那成都事件が報ぜられた時、「お父様もう支那をお渡りになつた後か」を確めたのこ好一對の話である。

### 父への音信

父の歸朝が延びるこゝになつたので、最近章は父への手紙を書くこゝが日課のやうになつた。出發當時は辛うじて「ハヤクカヘツテキテ、オミヤゲナンデスカ。」の二條件を緩るのみであつたが、最近は書く範圍が擴大されて大部面白いものが出来てきた。この可憐な文字を犠牲にしても、所用のためには踏み止まらねばならぬ主人の苦衷は察するに餘りある。これらの手紙は、真情の吐露を第一にしたいから、父の判讀出来る範圍に註を加へ、ふ可解な所は「何ぞ讀むの。」こきいても見るが、そのまゝに出してしまふもあゝる。本人にも分らぬこゝがある。太字は抜字、假名遣などは片言のまゝである。以下原文のまゝを……。

(1) オトウサマ、アキニナラナキヤ、カエラナインデスカ。  
マダトハオソイデスネ。オミヤゲハナンデスカ。ボクハ  
オトウサマガイナイトサビシイヨ。イケノクミニナツタ  
ノニ、ウソツキデスネ。

(2) オトウサマダレガイチバンエラインデスカ(この頃ス  
クラップブックに「エライ人」いふ標準で貼拔をしてゐ  
るから、この疑問が浮んだのであらう。これは姉の皇族  
畫帖作製の影響である。)オトウサマワゴデカツテミンナ  
降參  
コウサンシタノデスカ(私へのベレンガリア船上通信を  
讀聞かせた内容からかくいふ)コノトケイワ(幼稚園の作  
業で作つたものを封入する)マンナカノカナグノトコロ、  
ソレマワセバハリガウゴクノデス。イマヤオヤオツ  
クツテイマス(幼稚園作業)オトウサマニミセタイ。  
(3) オトウサマノトコロニギヨウダイジニシテイルデシ  
ヨ(アメリカから學校へ人形を寄贈してきた時、人形を  
迎へる式があり、式後先生がかく仰せられたいふ。ア  
メリカミいふので心引かれたのであらう。)オトウサマオ  
テガミアリガトウ。ボクワオトウサマガイナキヤサビシ

イヨ。オトウサマノトコロデハニギヤカデスカ。ボクノ  
トコロデハウルサクテウルサクテタマリマセン。ミンナ  
ガオホサワギデ(こゝまで讀んだら家のこゝろこゝろ思つたが、  
近所の子供のこゝろになる)ボクノウチノオゲンカンノト  
コロエ、ロウセキデカイチヤツテシヨウガアリマセン。  
ソウシテブランココワシテシヨウガアリマセン。ソウ  
シテボクニイシオブツケテイヂメタリシテ、シヨウガア  
リマセン。

(4) ボクノトコロオザシキノシヨウヂキレイニナリマシ  
タ。オトウサマオハナレノトコロニタナガデキマシタヨ。  
オトウサマガカヘツテキタラヨロコブデシヨ(最近ロシ  
ドンから書籍が届いたので、それを並べる棚こゝろ思つたら  
しいが、實は私の本棚であつた)

(5) オトウサマオフロカイテ、イイリツバナオフロニナリ  
マシタ。ソウシテオトウサマハイレルオフロダカラ、オ  
トウサマハヤクカヘツテキテクダサイ。オミヤゲモツテ  
キテネ。オトウサマガカヘツテキテ、マタアソビマシヨ  
ウネ。イイ、ワカリマシタカ、サヨウナラ。

(6) オトウサマセイコチヤンハイタヅラデ、レイコチヤンハシンブントルノガスキダシ(受信函に手紙を取りにゆく役目)ボクハブランココギノセンシユウデス。ネエチヤンハオトモダチトアソンデ、ベンキョウハヌカシテ

イツチヤウンデス。コレデミンナノイタヅラハワカツタデシヨ。ソウシテセイコチヤンハハイノガトツテモハヤクテゴフジヨ不淨ウマデイツチヤツテカナイマセン(廊下をきこまでも這つていつて手洗場までいつてしまふこ

ミ)セイコチヤンハイスデタツタモシラレルンデス。セイコチヤンハエラクナツタデシヨ。セイコチヤンハオリコウデシヨ。

(7) オトウサマウチノモノ物置キノトコロニオオキイネココカラ、コドモノネコガウマレタンデスオトウサマガツコウンスンダラ、サメジマノオウチニ引越シコスルカラ、イツテキタラオムカヒニイクカラ。(返子で鮫島の隣を借りるこミにきめたので歸つてきたらお迎へにゆく頃になるさいひきかせてあるので)

セイコチヤンハオリコウニナツテキルデシヨ。サメジマ

ノウチニモイカレルシ、オトマリモサレルヨウニナツテ。オトウサマノトコロシツテイマス。ニユウヨウクツテイフトコロニイルンデシヨ。ミンナゲンキニシテイルデシヨ。ヨロシクネガヒマス。

(8) オトウサマネコハニダテイツチヤイマシタ。オトウサマカヘツテキタラ、オミヤゲキカンシヤオカツテキテ、デンゲンシヤカラキカンシヤモラツタンデス。オトモダチニシツケイシテオトウサマカヘツテキテヨ(章の生まれないずつとく昔、お父様がニユーヨークにいらつしやつた時のお友達が、たくさんいらつしやるさいふ話をしたので)オトウサマニオテガミダシタノニ、オトウサマモテガミダサナキヤアヅルイヨ。ボクドンドンダシタノニ、ネエチヤン1ツカイモ、ダサナイデ、テガミダシタノコレダケデシヨ、サヨウナラ。

なほ最近の主人への私信の一端を掲げて、章の近況にかへよう。

久仁子の學校の作業が進むにつれて、机を並べてゐる草

のみようまねも大部進んできました。併し久仁子に見られなかつた一面が、段々この頃芽を出してきたやうに思ひます。それは機械類への興味です。時計の古いのや、おもちゃをぎん／＼解體してゆくのです。螺釘をさるこまが面白くて、この間著音機が廻らなくなつたら、早速釘をはづし始めました。二輪車にいつのまにか懐中電燈を裝置して得々然ミ走つてゐます。この間床屋の前を通りましたら、床屋の看板(赤、青の線が廻つてゐる)のスイッチを切つてしまつたので、あつミ思つてゐるミ、又つけてニコニコ追ひかけて來ました。こてもいたつらではらく／＼します。浩さんの十六ミリの映寫には切手に助手の役を勤めてゐました。電気機關車を廣げられるミ八疊の間に足の踏場もありません。疊に高低があるのは、雜誌なミをあてがつて、レールの迂りをよくしたり機の足を跨がせて、トンネルを形ぎつてゐます。轉轍機の信號も獨りで取りはづしてゐます。省線電車にのるミ一番先の車に乗つて、運轉手の所作を一心に見てゐます。外の信號にも注意してゐるやうです。そ

のうちに何かの結論に達するのでせう。

もう一つは生物への興味です。併しこれは今の所集中欲に止るので、取つてさうするミいふのではありません。ミ、すやかたつむりや蟲類をミこで探し出すのか集めてきます。この間古いバスケットを何氣なく開けたら、たくさんバッタが飛び出して、舌切雀のおばあさんもかくやミ思はれました。子供の心は海綿のやうにぐん／＼新しいものを吸収してゆきます。子供のほん／＼の相手になるこまは、大學の先生以上にむづかしいこまです。

倉橋先生の最近の御著書「育ての心」を拜見してゐます。

「子供を育てるのには、強要があつてはならぬ、作爲があつてはならぬ。ミこまでも自ら育たうミする偉大な自然の力を敬重し、愛惜してゆかねばならぬ」ミ仰つてゐます。しかしそれには細心の觀察ミ根強い忍耐ミ、それらを買く愛の力がなければ出來ないこまでせうね。あなたの少々甘い滋養糖ミ、私の少々辛い榮養劑(先生からごらんになれば不消化劑かもしれぬ)を調和して、先生の御言葉を基準に、一日も早く兩親の揃つた家庭の幸福を子供等に注ぎ得

